**説教20230514一ヨハネ4：7-21ヨハネ15：9-17「神は愛なり」**

**今日は、神は愛なりということで説教しますが、聖書で言われていますのは、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。ということであります。**

**信仰と希望と愛。これらはもちろんキリストの信仰、キリストの希望、キリストの愛ということですが、その中でも最も大いなるものはキリストの愛なのです。**

**この大いなるものと言うのはいろいろな意味がありますが、一つには、私たち人間の側から見ても、この三つのうち最も心惹かれる言葉と言うのは愛、なのではないでしょうか。私たちは、長い人生にわたって愛を求めて生きる者たちです。愛がなければ、人生を前に歩み出す元気が失われてしまいます。そして聖書で言われていることは、私たちは、愛を受けることよりも、愛を与える方が、より幸いであるということです。**

**この世の中においても、愛と言う言葉は溢れています。それだけ人間が愛を求めていることの現れの様に思います。しかし、この世の愛の実態は、愛が満ち溢れているというよりは、愛が冷えていると言った方がふさわしいのではないでしょうか。**

**この様に、今日の世の中の愛の有様を、私が恐れることなく客観視して語ることが出来るのも、又、大いなるキリストの愛のおかげであります。**

**今日の聖書箇所で語られていますように、私たち人間にとって、神の愛にとどまり、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまっていて下さるということが何よりも大事であります。言い換えれば、私たちが最後まで、いつもイエス様と共に歩んで行くということです。このことが何よりも大事であることの理由は、このキリストの愛が、全ての愛を作り出す源であるからです。男女の愛、夫婦の愛、家族愛、友人の愛、そして隣人愛の源であり、礎となるのが、キリストの愛であります。**

**このことを具体的に言えば、私たちは聖書に書いてあります、キリストの御言葉を疎かにしたり、忘れてしまうとき、人を愛することが出来なくなるということです。これは何と畏れ多いことでしょうか。私たち人間が本当におそれるべきことは、主イエスから離れ去ってしまうことへの恐れであり、主イエスから離れてしまわないように恐れを持って、日々御言葉と向き合うということです。**

**このように神様がおそれおおいというのは当たり前のことですが、そればかりを強調する必要はありません。私たちが、主イエスを心から信仰し、イエスに希望を置く時、イエス様は、泥沼で今にも沈みそうになってあえいでいる私たち一人ひとりに、救いの手を差し伸べて下さって、その泥沼から救って下さって、神の愛で満たして下さって、流れ出る涙をぬぐって下さって、私はあなたを最後まで守り、決してみなしごにはしておかないという愛の言葉を惜しみなく与えて下さる、愛なるイエス様なのであります。**

**さて、イエス様はなぜ、私たちに、「わたしの愛にとどまりなさい。」とおっしゃっているのでしょうか。。神の愛は、大いなるものであります。**

**ヨハネによる福音書/ 03章 16節**

**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**

**この様に神の愛は、計り知れず大きく、深く、永遠の喜びがある、変わることがない愛であります。神の愛に比べて、人間の愛は何と小さく、薄い物でしょう。人間の愛は、身の程知らずで、最高潮に高ぶったかと思えば、少しのきっかけで、その愛は急降下して、喜びが怒りや憎しみへと変わってしまうという、憐れなものであります。**

**しかし、そのような弱く貧しい、世の人を、主イエスは憐れんで下さって、選んでくださって、この様に、御言葉を素直に聞いて、御言葉に謙遜に聞き従う私たちへと変えて下さったのであります。この様に、愛がない状態の処に、愛をもたらし、愛を作り出して下さるのが神の愛なのであります。このことからイエス様が私たちに「わたしの愛にとどまりなさい。」とおっしゃるのはまことにもっともな仰せなのであります。**

**しかし、私たちは神の愛に留まり続けることが難しいのです。そして、留まり続けることが出来ないで、神の愛の外に出てしまうのです。**

**このような全ての人が持つ悪い性格を、聖書では罪があると言います。私たちは皆、罪人であると申します。私たちは罪人であるがゆえに、イエス様とずっと居続けることが難しいという性格を持っています。**

**このことのわかり易いたとえ話が、ルカ福音書の15章11節以下の放蕩息子のたとえに記されています。新約139ページからになります。父なる神であるお父さんは、二人いる息子の内の弟のほうから、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言われるままに、財産を弟に分け合たえ、遠くの国へと自由に旅立たせました。そして弟がその国で放蕩の限りを尽くして、お金を使い果たして戻って来たのにも関わらず、その弟の罪を、当然のように赦して、父親の家に戻ってきた喜びを、家じゅうで共有するために大宴会を開いて祝福したのでした。**

**その大宴会で皆が喜んでいるのを見て、ひとり怒りの感情を抱いていたのが上の兄であります。彼は言いました。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」少し長い引用になりましたが、ここをよく読みますと、父なる神の息子たちへの愛は、不変であり、その愛は、父と息子が一緒に暮らしている時には、まるで息子たちには感じられない程に、大きく深い愛であり続けているのです。そんな大きく深い愛に、息子たちは留まり続ければよいものを、そうはいかないのが、人間のもつ罪悪であり、その罪悪は、何とか父なる神の愛から、私たち人間を引き離そうと手を尽くしているのです。**

**この放蕩息子のたとえ話を聴いていますと、まるで現代社会で繰り広げられています、愛憎劇のエッセンスを聴いているようで、本当に教訓にもなり、又、大いなる神の愛に気付かせられるキッカケを与えられます。**

**さて、皆さま、イエス様から「わたしの愛にとどまりまさい」と聞かされて、率直にどう思われるでしょうか。イエス様が大好きな方ならば、もうこの御言葉だけで大満足できることでしょう。私たちのイエス様と共に歩む信仰と希望の道というのは、この様に満足できる歩みでありたいと願う者ですが、私たちは時に放蕩息子を演じ、怒りに支配される兄を演じてしまうものたちであります。**

**そんな罪人である私たちに対して、イエス様は、次の様に語りかけられます。**

 **ヨハネ福音書15章 12節以下**

**わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。**

**友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。**

**わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。**

**この段に、イエス様が語る愛の第二段階があります。このように愛と言うのは行いであることに違いはありません。私たちのこの世での愛の在り方は、行いによって深められ、拡げられていきます。逆に、行いに失敗して愛が小さくされることもあります。**

**このように人間の愛は浮き沈みがあって、常に高いところに留まっている神の愛とは比べものにはなりません。そして人となって下さった神様であるイエス様は、そんな人間の愛の実態も、我がこととして受け入れた上で、この様に、私たちに愛の行いをすすめておられるのです。**

**イエス様は、私たちの愛の行いが、放蕩に終わらない事、怒りへと至らないことを切に願っておられます。父なる神に選ばれた私たちが、出かけて行って実を結び、その実が残るようにと願い、愛の実りが豊かに実を結ぶようにと切に執り成し、私たちのために祈っておられるのです。**

**思えば、イエス様ご自身も、この世の誰にもまして、行いの人としてこの地上を歩まれました。この地上でのご生涯の最後は、友のために自分の命を捨てることで迎えられました。そうしてこの十字架に神の愛が顕れたのですが、私たち人間にとってこの十字架は、愛を行っていくための何よりの、拠り所であり、命の泉として、今ここに掲げられているのです。**

**愛と言うのは応答であります。私たちはこの世に在ってお互いに応答をしながら愛を深めていく事が出来るでしょう。愛の応答無くして愛の深まりはないでしょう。しかし人間の愛の応答は時に行き違いを生じ、失望や悲しみをもたらします。私たちは、それをおそれて、愛の一歩を踏み出すことをおそれてしまいます。**

**それゆえ神の愛は次の様に私たちを励ましていて下さいます。**

**ヨハネの手紙一4章 18節**

**愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。**

**私たちは、幸いなことに、高いところに留まっている神様と、御子イエス様を通して、愛の応答をすることが出来るようにされています。**

**私たちは、愛し合う喜びを得ようとして、この世で手を尽くしてあれこれ行っていくものたちであります。でもその行いに的外れな事、罪多きことが多いのも実情であります。しかし、そんな罪人である私たちが、神の愛に留まりながら、その愛の業を行おうとするとき、たとえその業が的外れな事であっても、共に歩んで下さるイエス様がその都度、声を掛けて下さって、本当の喜びに満ちた、正しい行いへと、手をとって軌道修正して下さるのです。**

**ヨハネの手紙では、わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。という様に、私たちの愛の行いのほうが、神の愛に留まるということに先んじて、記されています。これはどういうことでしょうか。**

**このことは、神が恵みによって、愛し合えない貧弱な私たちをも選んでくださって、愛し合える者へとして下さったということです。ですから、私たちは、この地にあって、神に選ばれていることに感謝しつつ、互いに愛し合うことを実践していく事によって、最もふさわしく神の愛の内に留まり続けていて、その愛を証ししていく事になるのです。**

**愛の神は、この地上に在る全ての人を選ぼうと、願われています。その神の願いが実現する為の証し人として私たちは今、生かされています。私たちは、聖書に記されているとおり、十字架に至るまで、謙遜に愛し合う姿を、神と人との前に証しをして、神の愛がこの世にも満ち溢れますよう行って参りたいと願います。**

**父なる神**

**父よ、あなたの愛は大いなるものであり、高き処に変わることなくあられます。どうか御子によって私たちを、あなたの大いなる愛に留まるものとして下さい。**

**私たち人間は皆、罪人であり愛することに貧しい者たちであります。しかし、御子イエスは私たちを選ばれて、あなたの大いなる愛の様に、愛し合うようにと常に聖霊によって励まし導いて下さいます。どうか私たちが常に、あなたの御言葉の通りに、愛し合うことが出来ますように、常に私たちの内に留まって下さい。**

**あなたを悲しませる出来事が世の中のあちこちで起っています。戦争や内戦が絶えず、又、争いによる悲惨がすぐそばに迫っています。どうか命の泉であるあなたが、争いの内に、平和を与え、私たちが恐れることなく愛し合うことを行って行けるようにして下さい。私たちが行う、小さい愛の業を、あなたが豊かに祝し用いて、この地を歩む私たちの歩みの喜びを確かなものにして下さい。**